

## 第六章 十九世紀終る

### 一 唐物販売

いよいよ明治三十三年の一九〇〇年、十九世紀はこの年をもって終るのである。考えてみれば東京にも、三井白木の両呉服店、あるいは駒形の鱈屋、塩瀬の菓子屋など、百年はおろか、数百年の歴史をもつ旧舗がないわけではないが、多くは維新以後の創業者をもって東京の商業はまかなわれており、ことに丸善のような洋書や唐物の専門店も、舶来品御禁制の維新以前は、成立の想像もおよばなかったことである。その意味で丸善はこの世紀という中にも特にその後半になっての十九世紀ッ子である。「学の燈」のこの年第一号の巻頭の色紙広告の第一頁には、国歌と、それから富士に帆かけ船のカットの横に、次の挨拶がのっている。

「新年之御慶目出度申納候。随而弊店儀年来御愛顧ヲ蒙リ難有仕合ニ存奉候。当年モ相不変御引立之程偏ニ奉願候先ハ歳端之御祝儀申上度如此ニ御座候恐惶謹言

明治三十二年一月

東京市日本橋区通三丁目

丸善株式会社書籍店

同 洋物卸店

同 洋物店  
同 工作部

(三十二年とあるは、元より誤記か誤植である)

時に応じていろいろの変容はあったが、十九世紀を終るころの丸善は、だいたいこの四部組織をもって固まったものの如くである。

書籍部は丸善の中心であり、心臓であるから、目星しい輸入書についてはその輸入の時に応じて書くことになる。洋品部は、既述の唐物店のことで、唐物とは中国古代の国号から出たので、かかる名称を用いること、今からすると奇怪に考えられるが、古く中国伝来の物品を唐物として珍重し尊敬した遺風で、西洋からの舶来品も市井では一般に唐物と称して異としなかった。丸善がその唐物として直接取引をおこなっていた商店は、イギリスのトーマス・トーンメントのほかにはクリスチイの帽子、アメリカのポッタードラッグのキューチキュラ石鹼で数が少なかった。その外は日本にある代理店を通じて取りよせていたのでゴスネルの化粧品(英)、フォックスの傘(英)、ロジャー・エグレエの化粧品(仏)、ドルセエの化粧品(仏)、コルゲートの化粧品(米)などが主であり、元は洋酒も販売していたが、これは三十年二月に中止した。この部門が洋物卸店と名称がかわったのである。

別に既述の如く菱屋というのがあり、林亀吉との共同経営で、主として西洋馬具、皮革製品の小売をしていて、丸善の名を出すのを憚っていたのであるが、そののち林の出資金を返済して全く丸善の経営とし、販売品目も馬具を廃して、改めて丸善株式会社洋物店に改組し、つとに明治三十一年六月十九日の「時事新報」に広告を出して一

般世間に吹聴したのが、このころになってようやく内容が固定してきたのである。

この明治三十三年三月、丸善は本郷区駒込千駄木林町八十二番地にあった福沢キヨ（福沢英之助妻）所有のメリヤス工場を買収し、四月一日からその経営をはじめた。家屋一棟、器械十九台および付属品一式二千二百円である。しかし定款の中に、会社の目的として製造業のことは規定されていないので、洋物卸販売係主任であった渡辺源次郎名儀をもって営業することになり、七月二日提出の営業届によれば、資本金は二千元、従業員十三人、うち職工十二人という規模で、丸善が渡辺との間にむすんだ契約は次の如くである。

### 契約証

丸善株式会社ハ所有ノ本郷区駒込千駄木林町八十二番地内建物及器械一式ヲ渡辺源次郎へ貸渡シ渡辺源次郎ハ前記建物及器械一式ヲ借受ケ莫大小其他ノ物品製造ヲナスニ付双方ノ間ニ契約スル条項左ノ如シ

第一条 丸善株式会社ハ渡辺源次郎ガ莫大小其他ノ物品ヲ製造スルニ付要スル所ノ資金ヲ供給スベシ

第二条 丸善株式会社ハ建物及器械ノ貸渡料ヲ請求セサルベシ

第三条 渡辺源次郎ハ丸善株式会社ノ指図スル物品ノ外ヲ製造シ其他ノ物品ヲ製造スルコトヲ得ス

第四条 渡辺源次郎ハ丸善株式会社ノ外ニ承諾ヲ經スシテ製造品ヲ販売スルコトヲ得ス

但丸善株式会社ノ承認ヲ經タルモノハ此限ニアラス

第五条 渡辺源次郎ハ丸善株式会社ノ承認ヲ經スシテ従業員ヲ雇入レ若ハ雇ヲ解キ又ハ給料ヲ定ムルコトヲ得ス

第六條 渡辺源次郎ハ要用ナル原料ノ買入及ヒ要用ナル工場費ノ外漫ニ買入レ又ハ支払ヲナスコトヲ得ス  
第七條 建物及器械ノ修繕其他臨時費ヲ要スルモノアルトキハ其都度丸善株式會社ノ承認ヲ得ルモノトス  
第八條 製造品價格ハ丸善株式會社ノ協議ノ上定ムルモノトス但丸善株式會社ノ承認ヲ得ルトキハ價格ノ變  
更ヲハ双方協議ノ上為スコトヲ得

第九條 本製造業ニ付利益ヲ生ミタルトキハ總テ丸善株式會社ヘノ所得トス差出スベシ

第十條 本製造業ニ付若一損毛ヲ生シタルトキハ丸善株式會社ニ於テ其損毛ヲ負擔スベシ

第十一條 渡辺源次郎ハ每半年一月ノ兩損益計算表ヲ調製シ丸善株式會社ニ差出スモノトス

第十二條 本契約ハ明治三十五年十二月卅一日ヲ以テ滿期トス

右契約ノ証トシテ二通ヲ作製シ左ニ記名調印各一通ヲ所持スルモノ也

明治三十三年四月一日

住所

丸善株式會社

〃

渡辺源次郎

かくて渡辺は駒込工場に居を移して経営に當つたものの、満期にいたらない三十五年五月に名義人から退き、専



最上インキ広告

務取締役小柳津要人の個人名儀において、改めて経営することになった。

工作部では明治三十年に高須信経が入社し、インキの製造に工夫をこらした。只染粉をとけば出来る至極簡単なものに思えるが、色がよく、にじまず、たやすく変色せず褪せず、消えないで耐久力のあるものでなくてはならない。高須は薬剤官として台湾征討に従軍した前歴があり、苦心して、前任者安井敬七郎のつくったインキとは別に、さらに優良なものを完成して売り出したのが三十一年である。その広告文には、インキの需要は日を追うて益々その多きを加えつつあるが、未だ本邦製造品にして一つも佳良のものはなく、ために不廉なる舶来品にその需要を仰ぎ、年一年輸入の増加を見るに至ったのは実に遺憾に堪えないところである。よって弊社では専門の技師を備聘してインキの研究、製

造に当らしめ、其結果漸く粘質、変色、腐敗、沈澱の虞なき純良無比にして舶来品をも凌ぐ好製品を得た旨を記している。当時の容器の種類と値段を示せば

硝子丸瓶	一号入	赤色	各一瓶付	金 六 銭
同	二号入	黒色	同	金 十 銭
陶器瓶	六号入	同	同	金二十五銭
同	十二号入	同	同	金三十五銭

しかし安井製インキも製造を停止したのでなく、これを並インキと称し、高須製は上インキとして区別していた。並インキの製造の廃止せられたのは、明治三十六年五月、工作部が駒込工場にうつってからである。

明治小説の翹楚といわれる坪内逍遙の「当世書生氣質」には「印氣」とかいて、西洋の物をかく墨汁という註釈がつけてある。この発行の明治十八年ごろには、インキの一般に知られざること、そのようであったのだろう。しかしそれから十五年そこそこで、わがインキ製造はほぼ欧米の水準に達し、丸善インキの名が海内に高くなった。ただし、それが僻地の村塾の隅々までゆきわたって使われたのは、だいたい明治四十年以降であった。それまでは小学校でもっぱら毛筆習字を教え、英語をまなぶ者以外にインキの必要がなかったが、日露戦争後、高等小学校でも課外に初歩英語を課するところが多くなったのが、丸善インキを普及させるに与って力があつたらう。工作部では歯みがき粉も製造した。前任技師安井が日清戦争のころ、「日の丸歯みがき」というのを作ったが、高須はアメリカのコルゲート会社の製品を模して、「さくら歯磨」というのを売出した。品質の優良をもって一時すこぶる好評を博したが、原料が高く、したがって製品も高くついたので、その製造期間はながくはなかった。

## 二 小柳津要人伝

あだかも世紀の交替に応ずるようにして、丸善をめぐる人物にも変遷がある。

明治三十三年一月十六日、社長松下鉄三郎、四十八歳の壮年を惜しまれつつ、病をもって逝き、十八日芝の松秀

寺に葬る。彼は明治十八年の丸善危機にあたって社長の地位につき、苦難を克服して社業の回復につとめた。その間の十余年のながきにわたる辛勞が、彼の死を早めたものとして痛惜せられた。

一月二十日取締役会をひらき後任を互選して小柳津要人が当選した。取締役一名の欠員は、二月の改選期が間近だから、それまで待って、定時株主総会において取締役互選の結果、早矢仕有的と小柳津要人が当選、須賀磯八は大坂薬店の独立後、丸善の仕事にたずさわらなくなって取締役を辞任し、新取締役としては金沢井吉、中村重久が当選した。

翌三十四年二月三日福沢諭吉逝く。享年六十七歳。明治新文明の大導師たる彼の死は、国をこぞって痛惜したが、ことに丸善は彼のすすめに於て成り、いまでも大外護者であって、福沢の遺業中、慶応義塾をのぞいては、丸善がもっとも関係が深かった。丸善のほとけ（組織）をつくった者は早矢仕有的だが、これに魂をいれた者は福沢であったのだ。

しかしその早矢仕有的も同年二月十八日あわただしく福沢のあとを追った。享年六十四歳。葬式は二月二十一日小石川区金富町多福院に於ておこなったが、様式はすべて福沢の先例にならった。

早矢仕有的の伝記は既述のとおりであるから又くり返さぬ。丸家銀行破綻このかた、一切の表面的地位を去り、後半生は蕭条落莫の感をまぬかれなかったとしても、丸善が息を吹き返して、ようやく全盛時代を劃するに至ろうとする曙光をみては又もって瞑するところがあつたであらう。

諸先輩の相ついで、易簣したあとの新社長となつた小柳津要人は、弘化元年二月十五日に三河国岡崎にうまれた。

徳川家康の生地であり、幕府の大黒柱ともいべき本多家の家臣だから、熱心なる佐幕論者であったこと云うを要しない。小柳津は年十七にして御料理の間詰として藩に出仕し、間もなく側役の御次詰となった。

しかし江戸で、パークス英公使の頑強をにくんで、これを討伐する計画があつて、諸藩がみんな兵を江戸にあつめた時、彼は西洋流大砲方を命ぜられて、東上した。時に文久三年三月。

この新職役は、英書をまなぶ必要を彼に感ぜしめ、大鳥圭介の塾にはいった。のち西学のアカデミイともいふべき開成所に転じて、勉学にはげむこと数年。慶応三年十月將軍徳川慶喜の上洛とともに、本多家は譜代の重鎮なる故を以て、伏見の豊後橋の警衛を命ぜられ、それから維新の風雲にまきこまれて、幽閉せられたこともあり、脱藩したこともあり、慶喜の恭順後は東北にはしつて戦に敗れ、ついに蝦夷にわたつて五稜郭に奮戦したものの、惨敗を喫し、投降して明治元年九月、江戸に護送せられひと先ず本郷の藩邸にひきとられて、のち岡崎に送られ謹慎を命ぜられること数カ月。明治三年三月釈放され東上した。その途次沼津で英学者乙骨太郎乙に逢い、学僕となり英学を修め、藩の貸費生にあげられ大学南校に学び、のち慶応義塾の隆々たる名声をきいて、それに転じた。廃藩置県とともに、藩費が途絶し、各所を漂泊して、英語教師をして口を糊していたが、明治六年一月、横浜の丸善商社にはいり、十年三月大阪支店の支配人となり、十五年七月東京本社 of 支配人に転じた。

これは彼みずからの草稿を基とした「小柳津要人小伝」の概略を語つたのだが、これで見ると、英語の知識があつたことが、彼を丸善に結ぶ因縁となつてゐる。他面で彼は維新の折、各所で転戦した生きのこりで、つまり兵馬倥傯の人である。この武士的教養と経歴が、丸善の社風に、一脉稜稜たる氣風をもちこみ、早矢仕社長が「士魂商





小柳津要人（三代社長）

才」の人として歎服してやまなかったという理由がうなずける。

余談だが、この小伝には――

「東京に赴かんとし、途次静岡にて外山正一君に邂逅す。君、余の窮乏を憐みて金拾円をめぐまる」

とある。このイギリス帰りの外山の知遇を得て、当時としては大金の旅費を恵まれたのは、終生彼が感恩の思いを抱いて止まなかった。そこで文化史上ひとつの疑問が解けてくる。

外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎三人合作の「新体詩抄」が明治十五年七月刊行になり、日本文学史上いまだあらざる新しい詩を創始開拓し、文化史的に大きな役割を果たしたことは、今さら説くをもちいない。そしてこれが丸善から発行せられるにいたった因由は、当時のひとり、井上哲次郎博士が

「新体詩抄の原稿がまとまったからして、丸善の小柳津要人氏に来てもらって相談したところが、小柳津は快く承諾せられて、丸善から出版しようという事になった」

と語っているので、さもあつたらうと思われる。当時、あるいは参議大臣より社会的地位の珍重せられた大学の先生の著作であり、そして大学は店の最も大きな顧客であつてみれば、これを引きうけたのに多くの不思議はないとしても、そのほかに彼が日ごろから深く旧恩を感謝している外山正一が著者であることが、即座にその出版を決断した最も多くの要因であつたらう。

### 三 ドイツ文学書あらわる

この年移入せられた書物で、特筆に値するものもないが「学の燈」三十七号に Laticadio Hearn の *In Ghostly Japan* の広告が見える。この日本紹介の恩人ともいへべき帰化文豪の著作が、丸善の目録にあらわれた最初だが、定価四円は、当時として相当に不廉である。三十九号に *The Nuttall Encyclopaedia* の広告が、「Concise and Comprehensive Dictionary of General Knowledge」としてあらわれた。

丸善が創業以来あつかった辞書、簡易百科全書の類は、幾種類なるかを知らぬ中に、とくにこれを挙げるのは、定価も一円三十五銭で手ごろであり、明治三、四十年代の学生にこれほど愛用され、「ナツタル」「ナツタル」といって普及した辞書はほかにならぬ。

この年後期からドイツ書の移入の激増が目立ち、

*Just Arrived!!! Several Kinds of New German*

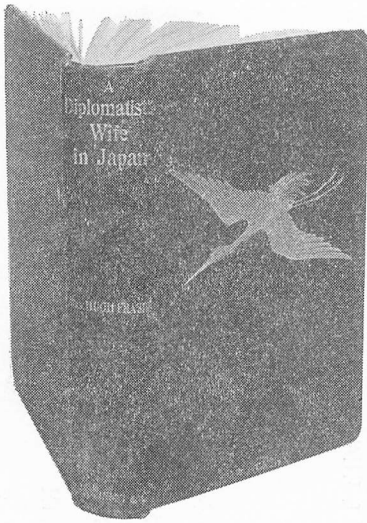
*Novels, price from .30 sen up to Yen 1.25*

とあり、この年十一月号（四十二号）には、

*Deutscher Klassiker mit Kommentar für den*

*Schulgebrauch und das Privatstudium. (Schönig's*

*Ausgaben) geb.*



Fraser—A Diplomat's Wife in Japan



貞奴(ピカソ画)

として Goethe, Schiller, Lessing の著作集から Kleist, Körner, Klopstock, Herder などの著作目録が全一ページを占めている。特殊な本としては “Now Ready” という頭語をおいてある。なおここに、前に日清戦争前、日本女性のため読書会をつくった恩人として紹介しておいたフレーザー夫人の

A Diplomatist's Wife in Japan, Letters from Home to Home. 1899

が新刊になって広告にあらわれている。with Two Hundred and Twenty Illustrations とはいっても七円五十銭の定価では普通読者には手が出ないが、わが国の新歴史をつくった憲法発布前後の数年の東京および日本の目まぐるしい推移変遷を、温かな女性的観察をなし、つとに幾多の駐日外交官および夫人の著書中、白眉として知られた。

#### 四 逝く世紀への記念

この年バリでは、逝く十九世紀をおくり、来る二十世紀を迎える意味での万国大博覧会が開催せられ、あわせて第二回オリンピック大会をひらいて、世界の客を吸収した。

日本からも、学者文人商賈政治家その他多くが渡仏し、ことに川上音次郎と貞奴が演じた日本の芝居は、多大の興味を喚起して、貞奴の演戯の絶妙は、イギリスの批評家アーサー・シモンズがサラ・ベルナル、エレオノラ・

デュゼ、エレン・テリイのヨーロッパ大陸三名女優をしのぐと絶賛し、まだ年少無名の画家だったピカソのスケッチにも貞奴切腹の場の一図が残っている。ロマンチック派音楽の鬼才と称せられたドビュッシイも観覧し、曲中に演ぜられる琴の音をきいて、あの不朽の曲「海」にはその影響があらわれていると云われる。

日本での代表的記念は雑誌「太陽」の刊行した「十九世紀」という増刊であろう。(明治三十三年六月十九日発行) 日清戦争のとき創刊されたこの綜合誌は、つとに「スエズ以東第一の雑誌」との評判を博していたが、この増刊はその名声を恥しめぬ誌界の偉観を呈した。内容は論説十篇、大隈重信、加藤弘之、井上哲次郎、田口卯吉などの文化界著者の談話寄稿の中で、島田三郎が「十九世紀の思想」なる論文で、

「社会主義、平和主義、同愛主義は、けだし十九世紀末期の思想にして、二十世紀を支配するものは、けだしこの思想の顕現なるべし」

と云っているのは、当時の日本主義の叫び声の盛んな日本全体から見ると、進歩的な卓見といわねばならぬ。

それから十九世紀の各論に入り、「総論」は当時論壇の飛將軍の観あつた高山樗牛、「ヨーロッパ史」は幸田成友、文豪露伴兄妹の末弟で、晩年に「丸善社史」の筆者である。「文芸史」は上田敏、欧米各国にわたって、ひろく各種の文学を概観するには、この人より外に任に堪える者はなかったであろう。外に「アメリカ史」「産業史」「学史」(自然科学と哲学と政治法律原理の変遷の三部にわかる)「教育史」「宗教史」最後が「東洋史」(東大陸諸国と日本の二部にわかる)ほかに「十九世紀歴史年鑑」と「十九世紀統計表」が付録になっていて、事この前世紀について知ろうとするには今日でも優に参考となる。

これに対し、泰西文物の移入口の役目を果しつつある丸善は、この世紀の推移については際立った反応を示しておらぬ。

しかし次の年、内田魯庵を社員にむかえたのは、格別この時勢を意識したためではなかったであろうが、結果からみて、新世紀に即応すべき十分以上の布石となったのである。